

太田俊雄（敬和学園初代校長）

「神さまの宿題」 - <ほんとうの学問>の項 - (p.27f.)

「人生の一生には、様々な出来事があって、その一つ一つが、その人の生涯の進路に影響を与える。そして、そのうちのあるものは、その生涯の進路を決定的に変えさせたり、その人格形成に決定的な影響を与える。」このような書き出しで始まって、小学校5年生（旧制）の時の思い出を、次のように語っております。

「5年生も終わりに近づき、私も中学校へ進学したいという強い欲望が胸中にもえはじめていた。それと同時に、我が家の家計の苦しさが、段々と分かりかけてもいた。2月のある休日のこと、父は朝から倉敷の町に出かけて、夕方になっても帰って来なかった。心配した母が、何回か父の帰りの遅いことを気にして口にするものだから、私は、村に通じる歩道の方に注意していた。すると、日の暮れかかったうす暗い道を、父が重そうに自転車のペダルを踏んで帰ってくる。ゆるい登り坂になっていたのである。やっと帰り着いて、ただ広い庭で、自転車を降り降りるなり、父が私の名を呼んだ。スパルタ式の父の躰は厳しかった。返事一つにしても、返事をする時の姿勢にしても、父はやかましく注意した。私は、名前を呼ばれながら「ハイ、お帰りなさい」と庭に駆けだしていった。「物置に行つて、ジョレンとスコップを持ってこい」「ハイ」。私は物置に行つて、ジョレンとスコップをかついでくる。両方とも土工の使う作業用の道具である。それをかついで庭に帰つてくると、待っていた父は「ついて来なさい」と村里の方へさっさと歩き出した。私は、父が私に力仕事をさせようとしていることを直感した。いやだった。もう日もほとんど暮れてしまっていた。身を切るような寒さが手をかむ(2月)。無口な父は、途中ほとんど何も言わず、さっさと村里の中に入り、それを通り抜けて、広々と展開する備中平野の田んぼ道を倉敷の方向に歩いていく。暗さは増していき、寒さは、いよいよ身にしみる。父は、一体どこまで連れて行く気だろうか？ 私は、不平と不満で心がいっぱいであった。それでも、父のあとについて行った。

やがて、小川に石橋のかかっている所まで来た。川の真ん中に石の柱が立ち、兩岸から板石が、3,4枚ずつかけてある橋であった。そこまで来ると父は、さもうれしそうに「さあ来た。ここじゃ」と立ち止まった。そして、橋のたもとを指差しながら、「俊雄、これ見い」と言う。そこには、直径5,60cmもある深い穴があつて、覗き込むと底には泥水がテラテラとにぶく光っているように思えた。

「お父さんのはう。倉敷への行き帰りには、いつも向こうの広い道を通る。ところが、今日は、どうした訳か、つい近道をする気になって、この道を帰ってきた。すると、ここにこんな大きな穴があいとる。これはあぶない。日が暮れかかるとるし、日が暮れてしもうてから、人様が通りかかって、この穴に落ちでもされようなら、おおごとになる。これはいかん。修理させていただこう。そう道々考えながら帰ったんじゃ。」

父にとっては、「修理しておいてあげよう」というような考えは高慢な事であり、「させていだけよう」というのが、父のいつもの心の姿勢であった。寒い、日のとつぷりと暮れた人気のない平野の真ん中で、父はまるで一人で瞑想しているかのように言葉を続けた。

「考えてみれば、お前ももう数え年13になったのじゃなア。13と言えは、そろそろ人生の本当の学問をしてもよい年頃じゃ。そう思うたから連れて来た。さあ、やろう！」

父は、うれしそうに、私に、その草の根を掘り返せ、あちらのわら束をもらってこい、などと、いろいろ指図しながら、自分も土を掘って運んだりして、一生懸命に働いた。私は、心の中で<人生の本当の学問なんかしなくてもいい>とか<人生の本当の学問をするには、自分はまだ幼すぎる>と行ったような不満をもって、それでも父の言うように働いた。2, 30分も働いたのであろうか。穴を埋め、盛り上がる位に土を盛って、それをふみ固め、それから小川におりて手を洗って、ぬれた手をズボンにすりつけてかわかす。その頃には、寒い風が気にならぬ程、体中がほかほかしていた。「俊雄、気持ちが良いのう」。暗闇の中に、嬉しそうな父の声がする。<何が気持ちが良いものか>と、私は心の中に強い反発がおこる。そして、私は応答に困る。「どなたか人様が見ておられんか？ 見回して見んさい」。闇につつまれた平野の真ん中である。誰が見ていよう。それでも、私はそう言われて、グルリと周囲を見回した。「お父さん、誰も見とる者はおらん」。「そうじゃろう。人様は、どなたも見てはおらん。だがのう、神様は見ておられる。お前が、これから大きうなって、どこに行つて、何をしようになるか知らんが、どこに行つて何をしようと、神様は見ておられるからな。それを忘れるんじゃないぞ。人はごまかせても、神様をごまかすことはできん。また、何をしようにしてもなあ、人様に見てもらおうとか、ほめてもらおうとか、そんなケチ臭い心でするんではないぞ。もし、人様のために良いことをするときにはな、そっとするんだぞ。どなた様にも気づかれんようにな。今日は、それを言いたくて連れて来たんじゃ。今日のことは、誰にも言うなよ。よいな」。